(191)

秘

合第四號ノ六

平和會議ニ關スル阪本海軍大佐ノ報告

號外第五號ノ六
號外第六號ノ六

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

號外第五號ノ六

平和會議ニ關スル報告

號外第五號

215962
昭和25年10月18日

平和會議ニ關スル報告

海牙府

海軍大佐坂本俊篤

明治三十二年七月三十日

海軍大臣山本權兵衛殿

號外第五号

總會ニ提出スヘキ第一部委員会ノ報告書

第一部委員会ハ第一議題至第四議題ハ六月三十日ヲ以テ委員総会ヲ終了シ而シテ本会議ニ提出スヘキ報告ハ平和会議ノ副長タル和蘭國全權「カルナベッリ」氏之ヲ担任スヘキ旨ヲ決議シタルノ結果本月十七日ヲ以テ決報告ヲ委員総会ヲ以テ議定スルノ手續ニ進メリ

決報告書ハ単ニ従来ノ委員会経過並ニ其議決ノ要領ヲ約括スル止マリ別ニ議論ヲ惹起スヘ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

キノ性質ニ属セスト雖モ氏報告委員ハ委員会ニ
諮ラスシテ少シク専断ニ出テタルノ吁為アル
ヲ以テ該報告会ニ於テ端ナク委員中ニ議論ヲ
沸騰セシメテ遂ニ之ヲ再ヒ訂正シテ報告スル
ノ已ムニ至レリ今其次第ヲ概記セントス

第一　将来五ケ年間ヲ期シテ軽気球若リハ
　　之ニ類似スルノ方法ヲ以テ爆裂弾ヲ
　　投下セサルコトヲ約ス

第二　敵ヲ窒息セシムルヲ以テ唯一ノ目的
トスル処ノ毒烟弾ノ使用ヲ禁止スル
事

右米國ノ除クノ外各國皆賛成其内九
ケ國ハ明ニ全会一致ノ条件トシテ賛
成スルモノニシテ即チ我邦モ亦其一
ニ属ス

第三

人体ニ中リテ容易ニ其形体ヲ変シ敵
ノ傷痍ヲ惨酷ニシ無用ノ苦痛ヲ与フ
ル処ノ小銃丸ノ使用ヲ禁スル事

英國米國ノ及對ト葡國ノ中立棄權ヲ

及對國アルニ係ラス大多数ヲ以テ是認セル問
題ハ

第二　敵ヲ窒息セシムルヲ以テ唯一ノ目的
トスル処ノ毒烟弾ノ使用ヲ禁止スル
事

右米國ノ除クノ外各國皆賛成其内九
ケ國ハ明ニ全会一致ノ条件トシテ賛
成スルモノニシテ即チ我邦モ亦其一
ニ属ス

第三

人体ニ中リテ容易ニ其形体ヲ変シ敵
ノ傷痍ヲ惨酷ニシ無用ノ苦痛ヲ与フ
ル処ノ小銃丸ノ使用ヲ禁スル事

英國米國ノ及對ト葡國ノ中立棄權ヲ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

除ク外各國皆賛成ス（後ニ至リテハ葡國モ亦賛成ス）

報告委員ハ第二第三ヶ条ハ僅々少数ノ反對アルニ過キサレハ尚之ヲ全リ廃棄スルニ忍ヒスト為シ且ツ盟約ノ体裁如何ニ依テハ或ハ一ニ及對國ト雖モ交譲的ノ精神ヲ以テ或ハ前説ヲ飜レラ多数國ノ意見ニ同意レ易カラレムルニ效アルヘレト思惟レ之ヲ委員会ニ諮ラスレテ專断ス右三ヶ条ヲ國際間ニ於テ將来ハ彼ノ千八百六十八年聖彼得堡ノ宣言ノ体裁ニ依リテ三ヶ条共ニ將来五ヶ年ヲ期レテ其使用ヲ等止スルコトヲ約スルノ体裁ニ原按ヲ作リ之ヲ賛今ヲ委員総会ニ求メタルモノナリ

曩ニ林全權ヨリ右三ヶ条ノ件ニ對レテ本邦政府ノ訓令ヲ請ハレタルカ為メナリ

提起セラレタルカ為メナリ

而レテ其採捨ニ依レハ此ノ三ヶ条ノ宣言ニ加盟スル國ハ之レト合時ニ自然ニ千八百六十八年聖彼得堡ノ宣言ニ加盟スルノ效カアル可キヲ意味スルモノナリ

委員総会（七月十七日）ニ於テ多数ノ委員ハ先ツ報告委員カ專断ヲ以テ斯ル原按ヲ発意スルニ於テ快カラス隨テ数多ノ難詰ノ声ハ処々ニ湧起セリ

曰本三ヶ条ノ宣言ニ加盟スルト合時ニ千八百六十八年聖彼得堡ノ宣言ニ加盟ノ效ヲ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

生スヘシトハ甚タ謂レナキコトニシテ吾人ノ此処ニ在ル所以ノモノハ本問題ヲ議スルノ権限ニ止マルヘキモノニシテ聖彼得堡ノ宣言如何ノ如キニ至テハ全ク権限外ノ事ニ属ス(マハン大佐)

我國并ニ米國ノ如ク未タ該宣言ニ加盟セサルモノハ右ノ場合ニ属スルモノトス

曰聖彼得堡ノ宣言ノ如キハ皆年期ヲ有セサル処ノ禁止ノ条項ニ属セリ然ルヲ今此年期ヲ有スル(五ケ年)三ケ条ヲ以テ之ヲ混合スヘカラス(露國委員)

曰第三条ノ如キ禁止事件ニ年期ヲ設クル不都合ナリ(仏國全權)

曰委員会ノ報告ナルモノハ宜シク其有体ヲ報告スルニ止マルヘキナリ報告委員ニ於テ委員会ニ於テ認識セラレサルノ件ヲ猥リニ改竄シ若クハ創意ノ原按ヲ提起スルハ大ニ不可ナリ

其最後ノ批難ハ多数委員ノ認ムル処トナリテ更ニ従来委員会ニ於テ有体ノ体ヲ報告スルコトニ改訂スヘキコトヲ議決ス

其他大砲小銃ノ件ハ将来各國政府ニ於テ熟考ヲ遂ケ可キ件及ヒ露國ノ提出セル海陸軍備制限按ニ関スル委員会ノ経過并ニ軍備軽減ニ関スル将来ノ希望タル決議按ノ件ノ如キハ凡テ従来ノ委員会ニ於ケル経過ヲ概括セルモノニ

過キサレハ特別ノ議論モナク凡テ原按ヲ可決シ議長「スタール」氏ノ報告委員ニ對スルノ謝辭アリテ散会ヲ告ケタリ

七月二十日ニ至リテ再ヒ訂正第一委員報告会ヲ開ク

議長「カルナベック」氏ハ報告委員ナリシカ第一部委員長「ベルナード」不在ノ故ヲ以テ代テ議長ヲ務ム故ニ一人ニシテ議長ト報告委員ノ資格ヲ兼帯スルモノナレハ頗ル異觀ヲ呈セリ)先ツ米國委員「マハン」大佐ニ向テ毒烟彈ノコトニ對シテ貴下ヲ除クノ外ハ凡テ各国賛成ナレハ貴國一國ノ為メニ全会一致ヲ欠クノ件ハ甚タ遺憾ニ堪ヘス更ニ貴下ノ再思ヲ促スコ

トヲ得ヘキカト大佐昂然トシテ起テ答テ曰ク予ノ主張スル処ノモノハ原則問題ニ属セリ自己ノ所信ハ多数ノ前ニ屈撓ヲ容ルサス米國全權ノ資格ヲ以テ其全意シ能ハサルコトヲ断言スト固ク前説ヲ執テ動カス

其他報告ノ文体ノ枝葉ニ就テ討論議決スル処アリテ散会ス

斯テ第一委員会ノ報告ハ二回ノ訂正ヲ経テ僅カニ完成セルヲ以テ七月二十一日ヲ以テ右報告ニ對シ本会議ヲ開始スルニ至レリ

平和会議開会以来二ケ月余議場ニ新聞紙上ニ到ル処囂々トシテ他ノ注意ヲ喚起セル処ノ英國ノ「ダムダム」丸ハ議会掉尾ノ偉觀トシテ英米聯

合對露ノ議論ハ端ナクモ此ノ最終ノ本会議々場
ニ大花ヲ散スニ至レリ
由来「ダムダム」丸ハ此会議ノ花ニシテ平々坦々無
味淡白ノ議場ヲシテ活気ヲ帯ハシムルモ
ノハ「ダムダム」丸問題ナリシカ曩ニハ世界各邦大
多数ノ排斥ノ下ニ独リ米國ト両々平ヲ攜ヘテ
屈辱セル英國ノ「ダムダム」丸ハ今日一朝ノ思出ニ
捲土重来ノ雰気ヲ鼓シテ汪瀾ヲ既倒ニ支ヘン
ト試ミタル英米聯合ノ態度ハ最モ奇観ヲ呈ヤ
リ
蓋シ禁制条文ノ発掇者タル露國モ又之ヲ及援
セントスル処ノ英國モ各々瘠シク其僻スル処
アリテ両ナカラ議場ニ聞然ナキ能ハス如何ト

ナレハ露ノ目指ス処ノモノハ英ノ「ダムダム」丸ニ
在ルヲ以テ其禁止ノ条文ハ之カ禁制ヲ宣告ス
ルニ效アルヲ求ムルノ外ハ他ニ視ル処ナリ又
英ハ其条文ノ禁制ノ拘束ヲ免レテ「ダムダム」丸ノ
使用ノ自由ヲ得ルノ外又他ニ異議アルコトナ
シ是両國共ニ其見識齟齬ニシテ未タ仁愛ノ高
義ヲ論スルニ足ラス独リ此間ニ立テ昂々然ト
シテ露國委員ノ起草ニ係ル原按ノ無猜ナル所
以ヲ罵リ暗ニ多数委員カ之ニ附加雷同セル不
見識ノ嘲笑セシトスルノ概アリ其本心ハ之ヲ
以テ英國ノ「ダムダム」丸ヲ固底セントシタルヤ否
ハ之ヲ問ハス彼ノ議論ハ正々堂々確カニ他ノ
説ニ一頭地ヲ抽リノ價値アリシハ之ヲ否ム能

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

ハサルモノ之レ有リ其概ニ曰ク
吾人ノ眼前ニハ「ダムダム」丸ノ有ルヿ無シ只仁
愛アル目試ミニ露按ヲ把テ視ルニ曰リ
人体中ニ在テ容易ニ膨張シ若リハ平扁スル
ノ銃丸即チ硬質ナル外被ヲ以テ其軸質ヲ全
ク包蔵セサルモノ若リハ其表面ニ欠陥ヲ設
ケタルモノヲ使用スルコトヲ禁スト
如斯条文ハ果シテ吾人ニ満足ヲ与ヘ得ヘキモ
ト云フヲ得ヘキカ是レ吾人ノ目的トスル処ノ
敵ヲシテ必要以上ノ苦痛ヲ蒙ラシメスト云ヘ
ル仁愛主義ニ於テ敢許ノ意義ヲ有スヘキヤ吾
人ハ遂ニ其之レ有ル所以ヲ認ムルニ苦シムモ
ノトス如何トナレハ本条文ノ如キハ単ニ其形

容ニ於テノミ之ヲ顧ミ(所謂英國ノ「ダムダム」ヲ禁
制スルニ適スルコトノミヲ顧ミテ)其精神ヲ問
ハサルモノト云フヘケレハナリ知ラマ吾人ノ
前途ニハ本条文ニ適合スル銃丸ニシテ却テ敵
ニ苦痛ヲ与ヘサル処ノ銃丸ヲ製出シ得ルナキ
コトヲ保セス或ハ本条文ノ拘束ヲ離レテ却テ
之レヨリ惨害甚シキ銃丸ヲ製出スルヿノ有ル
コトナキヲ保セサルニ非スヤ是レ条文ノ精神
ニ於テ吾人ノ具備セシメント欲スル処ノモノ
ニ於テ欠如タル所以ニ非スヤト即チ原按ノ皮
肉ニ入テ一々其肺肝ヲ刺スニ似タリ而シテ其
終リニ一ノ禁制条文修正按ヲ提出シテ曰リ
破裂質ニシテ無益ノ惨苦ヲ与ヘ并ニ一般ニ

敵ヲシテ直ニ戰鬪作用ヲ失ハシムルノ程度ヲ越コル処ノ銃丸ノ使用ヲ禁ス

英國ノ全權ハ直ニ之ニ向テ賛成ヲ与ヘタリ是レ他ナシ此条文ヲ以テスルトキハ英國ノ「ダムダム」丸ハ直ニ其禁制ノ宣告ヲ免ルヘキヲ以テナリ是多数委員ノ最モ忍フ能ハサルモノニシテ米國委員ノ提議ノ如何ニ露國提議ノ原按ニ比スレハ其形容ニ於テ其精神ニ於テ優ニ頭地ヲ抽キシスルモノタルニ係ラス却テ多数委員ノ賛成ヲ得ル能ハサリシハ真ニ惜ムヘキモノニシテ若シ米國ニシテ真ニ英國ヲ庇蔭スルノ態度ヲ避ケ彼ノ修正按ニ加フルニ尚且ツ英國ノ「ダムダム」丸ヲ制禁スルニ效アル処ノ一句ヲ之ニ

抑入セシメナハ即チ単ニ破裂ノ文字ノ外ニ容易ニ人体中ニ入ツテ膨張若クハ平扁シ且ツ其表面ニ円滑ヲ欠ク云々ノ一句ヲ抑入セハ是ヲ完然無缺ナル名按ナリシナランニ惜哉彼ノ底心ニハ正々堂々露ノ提按ヲ排斥スルト今時ニ英國ノ「ダムダム」丸ヲ庇蔭セントセルノ態度亦掩フ能ハサルモノアリシナリ

故ニ多数ノ委員ハ米國按ノ露國按ニ優ルコトヲ知ルモノト虽モ苟モ之ヲ許容スルトキハ英國「ダムダム」丸ノ使用ヲ許容スルト今一ノ效アルヘキヲ以テ皆露國ノ原按ヲ賛成セントスルハ又疑ヲ容レス此際露國委員ノ其自國ノ原按ヲ維持シテ米國ノ提按ニ反對セル抗弁ハ頗ル努

メタリト雖モ其論拠ハ未タ米國ノ提按ヲ駁撃スルニ足ラス却テ其弱点ヲ顕露シテ將来他ノ議論ヲ容レムルノ余地ヲ剰レタルヤノ感アリ此ノ道理一偏ヨリ見ルトキハ米國ノ議論適カニ論拠アルヲ以テ之ヲ國ニ執リテ最モ善戦タルヘキハ明アナルヲ以テナリ

露ノ駁論ノ要旨ニ曰リ原按ノ防禦セントスルト処ノモノハ將来ノモノニ對スルニ非スシテ現在ノモノニアリ(現在ノ「ダムダム」丸ヲ指スナリ)

仁愛主義ニ依テ惨酷ノ武器ノ使用ヲ禁止セント欲セハ現在ノミナラス將来ニ向テ其效ヲ及ホサシムヘキハ勿論ノコトニ属ス聖彼

得堡ノ宣言ノ如キ皆此精神ニ依ラサルハナシ然ルニ本按ノミ独リ其效力ノ範囲ヲ現在ノモノニ限リテ將来ヲ慮ラストスルハ無稽ノ甚シキモノト謂サルヲ可ラス

又曰リ米國ノ提議ノ如キ之ヲ委員会ノ当初ニ提起セラレナハ委員ノ考究ニ上ルヘキハ勿論ナレトモ既ニ原按ナルモノハ此二ケ月以来数回ノ委員会及ヒ特別委員会ノ考究鍛錬ノ余ニ成ル処ノモノニシテ今ヤ此本会議ノ掌上ニ横ハルモノアルニ係ラス今又新ソニ提起セラルヽモノアリトセハ時期既ニ去リタルモノト云フヘシ故ニ本会議ハ宜シク今日迄推敲鍛錬シ来リタル処ノ原按ニ信ヲ置キ直ニ之ヲ是認セ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書(その1)書類の部 396

テレンコトノ希望スト
露國委員ノ抗弁ニ拠ル処ノモノハ草ニ時期
阮ニ去レリトニヒ今日迄推敲鍛錬ヲ積ミタ
ル原按ニ信ヲ措ヤレヨトニフニ過キスシテ
按其物ノ是非優劣ヲ以テ論セサリシハ抗弁
トシテ甚タ薄弱タルヲ免レサルモノトニフ
ヘシ
是按ノ是非優劣ヨリ論スルトキハ露ノ皐按
ノ米ノ修正按ニ及ハサル処ハ彼モ亦之ヲ知
ルヘケレハ強テ此点ニ於テ爭フコトナリ草
ニ其目的タル本会議ノ通過セシメンコトヲ是
リテノ便法タルニ過キサルナリ

此時多数ノ委員中ノ脳裡ニハ敢テ露米両按ノ
是非優劣ヲ穿索スルコトヲ望マス之ヲ以テ草
ニ英米聯合對露ノ對抗議論ト認メタルニ過キ
サルヘケレハ只恐ル処ノモノ如斯議論ノ分岐
リシテ再ヒ特別委員ヲ設ケテ之カ是非優劣ヲ
審査セシムヘシトナト云ヘル議論ヲシテ今日此
最終ノ会合ナルコトヲ豫期セル処ノ議場ニ顕
出セシコト是ナリシナラン
果然米國全權「ホワイト」氏ハ起テ如斯彼我議論ノ
岐ルヽモノニ對シテハ宜シク特別委員ノ審査
ニ附托シテ露米兩按ノ優劣ヲ調査セシムヘシ
ト主張セル其要ニ曰リ
予ハ技術ノ点ニ於テハ全ク門外漢タルコトハ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

論ヲ待スト虽モ銃丸ノ使用ニ関シテ、米國政府ハ其既往現在將来共ニ他ノ文明諸國ニ於テ使用セラルヽ処ノ銃丸ヨリ以上ノ惨毒ナルモヲ使用スルコトアルヘカラサルハ勿論ノコトニ属ス独リ恐ル露國原按ノ如キハ文句ノ形容ノ末ニ拘々然トシテ却テ其禁止スヘキ精神ヲ含畜セシムルコトニ於テ等閑ナルコト是ナリト曩キニ米國専門委員大尉「クロデエー」氏ノ説ヲ敷演シテ再ヒ特別審査委員ニ附托センコトヲ以テス

爰ニ於テ之ヲ満場ノ票決ニ附シタルニ之ヲ可トスルモノハ

米國　英國　希國　葡國　セルビヤ國ノ五ケ國

ニシテ其他ハ皆之ヲ不可トスルモノニシテ議論ノ大勢ハ元ヨリ動カス可リモアラサリシナリ

米國委員「マハン」大佐ハ起テ日ク本会議ニ於テ全会一致ヲ以テ成立スル処ノモノハ既往ニ之レ無ク將来トテモ亦有リ得ヘシト思ハレサル夫ノ軽気球ヨリ投弾メルカ如キ梦想的ノ箇条ノミニ於テ之ヲ得ルニ過キスト

是暗ニ露國委員ノ現存ノ惨毒ナル兵器ニ向ラ禁制ヲ施サヽル可カラスト云ヘル議論ヲ駁スルニ似タリ免ニ角大佐ノ言辞ハ別ニ重要ヲ認メスト虽モ之ニ對セル露國委員「ジリンスキー」大佐ノ答辞ハ將来ニ渉リテ影響アルヘ

キモノナレハ茲ニ掲記ス

露國委員ハ之ニ答ヘテ曰リ否又スレモ然ラサルノ証拠トシテ目下英國ニ於テハ空中投彈法ノ研究ノ目的ヲ以テ軽気球ノ使用ヲ考究中ニ非スヤト如斯議場ニ於ケル露國委員ノ明言ニ對シテハ英露兩國政府ハ応サニ其責ニ任セサル可ラサルノ言ニシテ若シ英國ニシテ此明言ヲ默過スル時ハ國際会議ニ於テ全会一致ヲ以テ非認セル行為ヲ実行セルモノニシテ英國タルモノ世界列國ニ對シテ其信用ノ軽重ヲ問ハントスル処ノ問題ニ属セリ

〔頃日英國「アルデシヨット」ニ於テ此種ノ実験アルコトハ既ニ新聞紙上ノ物議トナリタルモノヲ

散見ス〕

斯テ報告委員「カルナベック」氏并ニ露國委員「ラフアルビッチ」氏ハ議場ニ向テ先ツ露國按即チ報告ノ原按ニ就テ票決センコトヲ請求ス

此事件ハ端ナク再ヒ議場ノ議論ヲ湧起セリ

英國委員將官「アルダ」氏ハ起テ議事ノ通則ニ違反スルモノタルコトヲ抗議ス英國全權「バンスホート」氏モ亦之ニ和シテ如斯違反ハ本会議ノ威信ニ關重ノ繋ル処ナリトテ之ヲ痛論ス

米國委員「セスロー」氏〔法学者〕モ亦起テ議事通則ニ違反スルモノトナシ修正按ハ原按ヲ決スルノ前ニ於テ宜シク之ヲ票決ニ附セサル可ラスト駁論セリ

爰ニ於テ議論紛々殆ンド底止スル処ナキニ至ラントス此日ハ本会議ナルヲ以テ本会議長露國全權「スタール」氏議場ノ整理ニ任セサル可ラス然ルニ氏ハ年蓮既ニ古稀ヲ過キ今ヤ視聽官共ニ衰弱シ且ツ平常議事ニ慣習セサルヲ以テ頗ル困憊ノ色アリ僅カニ左右副議長書記官ノ補佐ニ倚ツテ僅カニ其任ヲ全フスルコトヲ得タルノ趣キ之レ有リ

即チ紛議ハ之ヲ零決ニ附スルコト、ナリ先ツ米國ノ按ヲ先決スヘキヤ否ヤヲ零決セレニ之ヲ可トセルモノハ

米國　英國　希國　葡國
墺國　セルビヤ國

清國　白耳義國

次ニ報告ノ原按露國按ニ就テ零決セレニ英國米國ノ及對ト葡國ノ中立棄權ヲ除キ外皆之ヲ可決セリ

故ニ米國ノ修正按ハ之ヲ零決ニ附スルノ要ナキヲ以テ其儘ニシテ息ミタリ

爰ニ於テ英米聯合シテ全世界ノ各邦ニ對抗レ捲土重来ノ意気アリレ「ダムダム」丸ノ問題ハ如斯シテ終ヲセリ

然レトモ「ダムダム」丸ノ是非問題ハ未タ之ヲ以テ決シタルニ非ス英國タルモノ宜シク世界各國ノ非認ニ向テ糸解ノ辞ナカルヘカラス此点ニ於テハ米國ニ對シテモ亦然リ否自國ノ人民ニ多ノ疑惑ニ向テ亦弁明スル処ナカル可ラス

果然此日英國全權ハ会議ニ向テ明言シテ曰リ
「ダムダム」丸ノ斯ノ会議ニ於テ多数委員ノ否認ニ
對シテハ本國政府ヨリ弁明書ヲ提出スヘキ筈
ナレトモ遺憾ナカラ今日ノ会期迫落手スルマ
トヲ得サリシヲ以テ追テ之ヲ他ノ報告書類ト
共ニ諸君ノ手許ニ送附スルコト、ナスヘシト
弁明書ナルモノハ光ス言ハン英國ノ「ダムダム」丸
ナルモノニ對シテハ諸君ノ視ル処ノモノ尽リ
誤レリ「ダムダム」丸ナルモノハ諸君ノ言ハル、如
キ挌毒ナル銃丸ニハ実際之レナレ彼ノ役ノ実
験ハ斯ノ如シ此ノ時ノ試験ノ成績ハ斯ノ如シ
トテ充分ニ其証拠ヲ挙ケタル未ニ於テ斯ノ如
キ理由ナルヲ以テ英国ノ「ダムダム」丸ハ諸君ノ想

像セラル、如キモノニ非ス幸ニ諸君此意ヲ諒
セラレンコトヲ請フト云ヘル如キ説明話シヲ以
テ此事件ヲ終了セシメ而シテ其質向追究ヲ避
ケンカ為メニ特ニ言ヲ違到ニ藉リテ之ヲ本会
議ニ披露セサルノ被告手段ニ出タルナカラン
カ果シテ然ラハ英國タルモノ弁究シタリト云
フヘク是レ決シテ信ヲ與國ニアラス本問題ハ将来ニ渉リテ
キ英國ノ威信問題ニ属セリ願ル注目スヘ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

215962
2
昭和25年10月18日

會議ノ終期

第二委員会ハ他ノ委員会ニ先チテ既ニ本会議ヲ終了シ第一委員会モ亦去ル二十一日ヲ以テ本会議ヲ了シタレハ剰ス処ノモノハ只第三委員会ノミナルニ至レリ是レ「バルガン」半島ノ郡小國中一セルビヤ國ローマニヤ國并ニ希國カ仲裁法ノ条款中ニ慊焉タラサルモノアルヲ口実トシテ種々ノ苦情ヲ提拱セルノ故ヲ以テ其協諾ヲ得ルニ於テ時日ヲ費セルヲ以テナリ

彼國輩ノ苦情トナス処ノモノハ其第三章國際審査委員第九条ヨリ第十三条ニ渉ルモノ并ニ國際仲裁法中第二十七条ニシテ彼輩ノ口実ニスル処ノモノ前掲諸条ノ見ノ如キハ会々雄國

国立国会図書館　伊藤博文関係文書(その1)書類の部 396

ロ本条ヲ挟シテ群小國ニ干渉ヲ与フルノ具タルモノナリトノ趣旨ヲ以テ之ニ不服ヲ唱フルモノニシテ所謂齊楚ノ間ニ狭マル処ノ彼弱小國ノ心情トシテハ諒スヘキモノナシトナサス然レトモ天下ノ大義公道ヲ以テ金冠トナス処ノ本按ニ對シテハ(鍍金ニモセヨ)論鋒頗ル薄弱ニシテ三國合従中「セルビヤ」先ツ降リ希國之ニ次キ孤城落日ノ「ローマニヤ」國モ僅ニ些少ノ交譲ヲ以テ敗余ノ名誉ヲ撑ヘ得テ本按ヲ兼諾スルコトヽナレリ

第三委員会ノ審査委員ハ屢々前記ノ群小國ト交渉ノ余協諾ヲ得テ七月二十五日ニ至リ本会議ヲ開キ報告委員(Descamps公法李有ニシテ年

来仲裁法ニ熱心ナル者)ヨリ成按ノ報告アリ満場異議ナク之ヲ是認ス

斯テ此日ヲ以テ各部委員会ノ事業ヲ終了シタルヲ以テ是ヨリ会議終末議定書調製ノ作業ニ進行ス

終末議定書ノ調製

終末議定書ノ調製事業ニ関シテハ既ニ委員ノ組織アリ伊國全權「ニグラ」(伯後「ニグラ」伯辞退シタレハ「アセー」氏之ニ代ル)之カ委員長トナリテ許議ヲ事ナタル結果七月二十五日本会議ニ於テ報告委員「ルノー」氏ヨリ議定書ノ体裁并ニ之ニ依テ生ス処ノ國際条約書及宣言書ノ体裁并ニ調印及ヒ其效果等ニ就テ説明スル処アリ各員異議

ナリ之ヲ可決ス
即チ終ニ議定昏トシテ各國全權ノ手署ヲ待チ
次テ各國政府ノ全意充ニ批准ヲ待ッテ國際条
約若リハ宣言ト為ルヘキモノハ尤記ノ条項ト
為ス

第一　國際条約ト為スヘキ
國際的紛爭ヲ平和的手段ヲ以テ始末
スルノ条約
第二　陸上ニ於ケル戦律及慣例ニ係ル条約
第三　千八百六十四年八月二十二日「セ子ブ」
条約ノ原則ヲ海戦ニ適用スルノ条約
第一　軽気球上ヨリ若リハ之ニ類スル方法
ニ依テ空中ヨリ爆弾若リハ爆発物ヲ
投下スルコトヲ禁スル事
第二　弥更ニ毒煙ヲ撒シテ人ヲ窒息セシム
ルコトヲ以テ害敵法ノ目的トスル処
ノ弾丸ノ使用ヲ禁スル事
第三　人体ニ中リテ容易ニ膨張シ若リハ平
扁スル処ノ銃丸ノ使用ヲ禁スル事
以上ハ今回会議ノ結果トシテ右條約ニ宣言
ニ加盟スル処ノ条約國ハ相互ノ間ニ守約ノ義
務ヲ生スヘキモノトス
之ニ異ナリテ尤ノ決議殊ニ希望按ハ単ニ会
議ノ結果トシテ其存在ノ事実ヲ見認メルニ過
キス

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

決議按

会議ハ現今坤輿到ル処負担ノ重キヲ感スル処ノ軍費ハ人生ノ有形若クハ無形上ノ幸福ヲ増進セシムルコトニ向テ大ニ制限スルノ要アルコトヲ認ム（全会一致ヲ以テ通過ス）

右ノ外会議ハ将来ニ向テ左ノ希望ヲ揚言ス

其一　会議ハ瑞西國政府カ「セネブ」条約ノ改正ニ関シテ先ツ弊旅セラルヽ処アルニ顧ミテ近々該条約ノ改正ヲ目的トスル処ノ特別ノ國際会議ヲ開始セラレンコトヲ希望ス（右全会一致ヲ以テ通過ス）

其二　会議ハ最近ノ國際会議ノ議題陸戦条規ノ二ハ中立國ノ権利並ニ義務ニ係ル件ヲ規定スル問題ヲ登スコトヲ希望ス

其三　会議ハ小銃並ニ海軍ノ砲煩問題ニ関シテハ曾テ会議ニ於テ討究ニ登リタルカ如ク各國政府ニ於テ考究ノ末其新式ノ使用若クハ口径ニ係ル問題ヲ新ニ各國協定ノ域ニ至ラシメンコトヲ希望ス

其四　会議ハ各國政府ハ斯会議ニ提起セラレタル処ノ按ニ顧ミテ露國ノ提按ヲ云フ海陸軍備並ニ其経費ヲ制限シ得

第五

ヘキヤ否ヤヲ考究センコトヲ希望ス

会議ハ海戦ノ場合ニ於テ交戦國ノ人民ノ所有ニ係ル海上ノ私有財産ヲ丘ニ侵スコト莫ルヘキコトヲ宣言セントスル処ノ提議ヲ將来ノ会議ノ議題ニ登サレコトヲ希望ス

其六

会議ハ海軍ヲ以テ港湾市府村落ヲ乙撃スル問題ヲ規定セントスル処ノ提議ヲ將来ノ会議ノ議題ニ登サンコトヲ希望ス

右希望按六ヶ条ノ内其二ハ瑞西國其三、四、五、六ハ英國各々其希望ヨリ分立スヘシトノ宣言アルノ外ハ全会一致ヲ以テ通過ス

条約按、宣言按、決議按、希望按ニ對スル我意見

条約其一（仲裁法ノ件）

通扁任意的ヲ以テ其精神トナスヲ以テ曾テ強制的ノ拘束カナク所謂無效無毒ナルヲ以テ加盟スルモ事ニ害ナカルヘキモノトナス

条約其二（陸戦条規）

多年ノ経驗ニ鑑ミテ軍事的着眼ト人道ノ博愛ト相待テ完璧ヲ为スモノナルヲ以テ加盟スルコトヲ妨ケス

条約其三（ゼネブ条約ヲ海戦ニ適用スル条項）

條約其二ニ対スルノ意ニ仝シ

宣言其一（空中爆彈ノ投下）
加盟ノ条件タル五ヶ年ノ後ハイサ知ラス
現今ニ在テハ未タ小説界ノ範圍ヲ脫セサ
ルモノニシテ加盟スルヲ事ニ害ナシ
宣言其二（毒烟彈ノ使用）
宣言其一ニ比シテ更ニ空想界ナルモノ（空
中爆彈ニ関シテハ英國ニテハ既ニ注意ニ
着手スル风説アリ）
宣言其三（容易ニ膨張スル小銃丸）
加盟國間ニ於テ其使用ヲ禁止スルニ於テ
ハ之ニ加盟スルヲ妨ケス
以上三宣言ハ彼ノ千八百六十八年聖彼得堡ノ
宣言ノ趣旨ニ基キ人道ノ大旨ニ依リ加盟國間ニ

於テ惨酷ナル野蛮的戦争ヲ為スコトヲ避クル
ト云ヘル趣旨ニ外ナラス故ニ宣言ニモ明記セ
ルカ如ク其拘束カハ単ニ其加盟國間ニ止マル
ヘク其非加盟國ニ非加盟國ノ同盟國ニ之ヲ使用シ得ヘキハ
アル場合ニ在リテハ我ノ之ヲ使用スルヲ妨ケス（非加
勿論ナルヲ以テ苟モ我ニ於テ此等ノ場合ニ対
シテ此種ノ禁制品ヲ用意スルヲ要トスル場
合ニ於テハ假令我之ヲ加盟スルトモ之ヲ用
意シ場合ニ依リテ之ヲ使用スルヲ妨ケス（非加
盟國等ニ対シテ）
故ニ以上三宣言ハ我ノ之ニ加盟スルモ決シテ
事ニ害ナキモノトス之ヲ要スルニ前掲三条約
並ニ三宣言ハ我ノ之ニ加盟スルモ事ニ害ナキ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

終末議定書、條約書、宣言書ノ調印
七月二十五日及二十七日ノ本会議ニ於テ終末
議定書、條約書及宣言書ノ体裁ニ就テ議定スル
処アリ越ヘテ七月二十九日ニハ各國全権ノ終
末議定書、條約書、宣言書ノ調印ヲ見ルニ至レリ
各國全権ハ其條約書若クハ宣言書ニ調印スル
ト、セザルトニ関セス皆寧ロ終末議定書ニハ
署名調印スベキモノトス是レ終末議定書ナル
モノハ單ニ斯會議ノ事実ヲ見認スルニ止マリ
テ其條約若クハ宣言書ニ署名調印スルノ件ト
ハ独立ノコトニ属スルヲ以テナリ而シテ其條
約書、若クハ宣言書ニ調印スルハ此日直ニ之ヲ
為スト或ハ来十二月末日ヲ期シテ之ヲ為スト

尤モ第一ノ条約ノ事ニ関シテハ十官所掌以外
ノ事ニ属スルヲ以テ是非ノ意見ヲ申出ツヘキ
限リニ無之ハ論ナシト雖モ事ヲ叙スルノ順序
トシテ辭見ヲ附記セルニ過キス候

ハ一ニ各國全権ノ撰ブ処ニ適従スベキモノトス是各国全権ノ権限並ニ本國ノ訓令ニ差等アリテ直ニ調印ヲ為ス能ハサルノ事情アルモノニ對シ若クハ遠遠ノ地方ニ在ル処ノ代臣ニ至テハ其議定書ノ全部ヲ本國政府ニ致シテ親シク其審査ヲ経テ然ル后諾否ノ及答ヲ得ルノ不便ナルモノニ對シ我邦ノ類)テ其便宜ヲ得セシメ可及的事ヲ慎重ニ為スコトヲ得セレムルノ法ニ依ルモノトス故ニ此日條約若ハ宣言書ニ調印スルモノハ各国齊シカラス欧州列強中露佛ヲ除クノ外ハ概ネ直ニ調印スルコトナク之ニ反シテ其第二流若クハ群小國ニ至テハ大概

閉會

仝二十九日午后三時閉会式ヲ行フ議長「スターリ」ハ會議ノ経過並ニ其成績ニ就テ述フル処アリ又各委員ノ勞ヲ多トシ且曰ク平和ノ種子ハ既ニ今回ヲ以テ蒔カレタリ吾人ハ其收穫ノ日アルコトヲ待ツヘキ也ト獨国全権「マンスター」伯ハ委員中等長ノ資格ヲ以テ答辞ヲ述ベ其他當國全権「カルナベック」外務大臣「ボーホール」氏佛國委員「デスプーレル」男ノ演説アリテ閉会ヲ告ケ後各委員酒盃ヲ擧ケテ談笑嘻々和気洋々ノ間ニ互ニ分袂ノ辞ヲ述ベテ散會セリ

林公使以下本邦委員ハ明日ヲ以テ此地ヲ引キ揚ケ小官ハ佛國巴里ヲ経テ英國ニ渡リ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書(その1)書類の部 396

月中旬過ノ便舩ニテ米國ニ航シ兼テ希望ニ
有之候彼國ノ海軍大學ヲ一覧シ且教師傭聘
ノ御内議ニ係ル模様ニ就テ探聞ヲ遂ケ度存
候此地ニ於テハ「マハン」大佐トハ常ニ往来親
敷致候ニ付彼ノ意向ヲ尋子候処迚モ本邦ニ
渡航ノ相談ハ見込無之尚米國ニ渡航ノ上ハ
相見スベキヲ約シテ相分レ申候
来九月十一日「バンクーバー」発ノ汽舩ニテ帰
朝可仕見込ニ有之候

會議ノ終

會議ノ終末ニ際シテ欧米各國駐在ノ公使館附
将校ニ左ノ如ク寄書仕置候

謹啓本地ニ於ケル國際会議モ昨日ヲ以テ閉会
ヲ告ケ申候右会議ニ就テハ種々御配慮ヲ勞シ
奉多謝候会議ノ模様等ハ疾ニ委細新聞紙上ニ
テ御承知相成且其效果如何ノ如キモ世間既ニ
定論有之候ニ付別ニ贅スルヲ要セスト存候只
其終末ノ結果ト将来ニ渉ル希望ニ関シテ左ニ
概要ヲ御報道申進候

會議ノ結果今回國際条約ト相成可申モノハ
左ノ三ケ條ニ有之候

第一　國際的紛争ヲ平和的手段ヲ以テ始末ス
ルノ條約

第二　陸上ニ於ケル戦律及慣例ニ係ル條約

第三　千八百六十四年八月二十二日「ゼ子ブ」條

約ノ原則ヲ海戦ニ適用スルノ條約
國際宣言ト爲スベキモノハ左ノ三ケ条ト爲
ス
第一　軽気球上ヨリ若クハ之ニ類スルノ方法
ニ依テ空中ヨリ爆弾若ハ爆発物ヲ投下
スルコトヲ禁スル事
第二　特更ニ毒烟ヲ撒シテ人ヲ窒息セシムル
コトヲ以テ宮敵法ノ目的トスル処ノ弾
丸ノ使用ヲ禁スル事
第三　人体ニ中リテ容易ニ膨張若ハ平扁スル
処ノ銃丸ノ使用ヲ禁スル事（英国ノ「ダム
ダム」丸ノ類ヲ意味ス）
第一ノ宣言ハ全会一致ヲ以テ通過シ第二、第三

ニ至テハ英米二ケ國不同意ナリ
以上三條約並ニ三宣言ハ各國ノ全権ノ調印次テ皇帝、
大統領ノ批準ヲ待テ國際條約若クハ宣言ノ效
力ヲ生スベキモノトス我國モ右條約並ニ宣言
ニ對シテハ異議ナク加盟セラルベキモノト信
シ候尤モ此際各國全権ニ於テ直ニ調印スルト
未ル十二月末日迄ヲ期シテ調印ヲ了スルトハ
各國ノ撰擇ニ一任スルモノニ有之即チ我國ハ
後者ノ態度ヲ取ルモノニ有之候
歐州列強中佛露両國ヲ除クノ外概シテ我國ノ
態度ト全様ニ有之候其他第二流國若ハ群小國
ハ此際全権ノ調印ヲ了シ申候
右條約及宣言ノ外ニ會議ハ左ノ決議案並ニ希

望ヲ揚言致候

決議案

會議ハ現今坤輿到ル処負担ヲ感スル処ノ軍費ハ人生ノ有形、若ハ無形上ノ幸福ヲ增進セシムルコト向テ大ニ制限スルノ要アルコトヲ認ム（全会一致ヲ以テ通過ス）

希望案ノ概意

其一　近々ノ「ゼ子バ」赤十字條約陸戦ニ関スルモノヲ改正スルノ目的ヲ以テ國際会議ヲ開ク事

其二　中立國ノ権利義務ニ係ル問題（陸戦條規ノ之ハ之ヲ最近ニ開カル可キ國際会議ノ議題ト為ス事

其三　小銃若ニ海軍煩砲ノ制限問題ニ関シテ各國政府ニ於テ考究ノ末互ニ快定ノ域ニ達セシコトヲ希望ス

其四　各國政府ハ軍備制限問題ニ就テ考究ヲ継續スルコトヲ希望ス

其五　戦時交戦國人民ノ海上私有財産ヲ互ニ相侵スコトナキ宣言ヲ為サントスルノ問題ヲ将来ノ國際会議ノ議題ニ上ス事

其六　海軍ヲ以テ港湾、市府、村落ヲ砲撃スルノ問題ヲ規定スルコトヲ将来ノ國際会議ノ議題ニ上ス事

右希望案六ヶ條ノ内瑞西國ハ其第二ニ英國ハ其第三、第四、第五、第六ヨリ分離獨立セシコトヲ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

明言セルモノハ外各國異議ナシ
右國際会議ノ諸問題ハ多少將来ニ渉リテ継續ノ性質ヲ持チ候儀ニ有之候間自今左ノ要領ハ我國ガ將来ニ渉リテ該諸問題ニ解釈ヲ與ヘル上ニ於テ考究ニ裨益スル処可有之ト存候ニ付有益ナル書籍若クハ諜報有之候節ハ其筋ニ向ヒ御報告相成候様希望仕候

其一、前掲ノ三條約、三宣言ニ對スル各國ノ態度并ニ評論

其二、決議案ニ對スル各国政府并ニ人民ノ態度并ニ評論

其三、希望案(六ヶ條)ニ對スル各國ノ意見、評論

記

一 平和會議ニ関スル阪本海軍大佐ノ報告 合第三號ノ六

一 同 合第四號ノ六

右受領候也

明治三十二年九月 日

記

一 平和會議ニ關スル阪本海軍大佐ノ報告 合第三號ノ六

一 同 合第四號ノ六

右受領候也

明治三十二年九月 日

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396
付属資料

明言セルモノハ外各國異議ナシ
右國際会議ノ諸問題ハ多少將来ニ渉リテ継續ノ性質ヲ持チ候儀ニ有之候間自今左ノ要領ハ我国ガ將来ニ渉リテ該諸問題ニ解釈ヲ與ヘル上ニ於テ考究ニ裨益スル処可有之ト存候ニ付有益ナル書籍若クハ諜報有之候節ハ其筋ニ向ヒ御報告相成候様希望仕候

其一、前掲ノ三條約、三宣言ニ對スル各国ノ態度并ニ評論

其二、決議案ニ對スル各国政府并ニ人民ノ態度并ニ評論

其三、希望案(六ヶ條)ニ對スル各國ノ意見、評論

其四、本會議ニ對スル一般ノ評論

右謹テ報告仕候也

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

215962
3
昭和25年10月18日

號外第六號ノ六

平和會議ニ關スル報告

號外第六號

平和會議ニ關スル報告　歐外第六號

在白耳義國「ブルッセル」府

明治三十二年八月七日

海軍大臣山本權兵衛殿

海軍大佐阪本俊篤

第二委員會第二部會ヅルッセル宣言改正案

六月十日委員會ニ於ケル英國委員「アルダ」少將ノ宣言

六月二十日戰鬪員タル資格ニ關スル同「アル「ダ」少將ノ提議

六月六日委員會ニ於ケル白耳義國全權「ベルナート」氏ノ動議ニ係ル敵地ニ於ケル法權ノ施行竝ニ徵發權問題

六月一日部會ニ於ケル米國委員「クルゲエル」

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

大尉ノ提議ニ係ル戰時交戰國ノ海上私有
財產保護問題

七月五日第二委員全會ニ於ケル前記問題ニ
係ル米國全權ノ宣言

七月一日第二委員全會ニ於ケル伊國全權ノ
提議ニ係ル攻囲及砲撃問題

第二委員第二部會
斯部會ハ露國政府囲章第七議題タル將来
ノ陸戰條規ヲ彼ノ千八百七十四年「ブルツ
セル」宣言ノ基礎ニ依リテ之ヲ改正センコ
トヲ希圖スルモノニシテ小官ニ取リテハ
直接担當ノ部會ニハ無之候得共他ノ部會
ニ出席セル餘暇ニハ時々臨席シ且現今海
戰ニ關シテハ一ノ條規モ存在セサル今日
ニ在テハ海軍ト陸上ニ於テ合戰スル
ノ場合ニハ本條規ノ精神ニ遵由スベキモ
ノト存ジ候ニ付斯部會ニ於ケル討議中緊
要ニ該リ候モノ左ニ報告仕候

彼ノ千八百七十四年ニ於テ各國使臣學者ヲ「ブ

ルツセル」府ニ會同セシメテ一ノ陸戰條規ニ係
ル宣言ヲ草定セシカ今日ニ至ルマテ各國ノ批
準ヲ經サルノ故ヲ以テ正式ヨリ言フ時ハ一ノ
死文タルニ過キストモ亦タ文明國間ニ於テ
ハ陸戰條規ノ本尊トシテ隱然依準ノ重キヲ爲
シ世ニ所謂「ブルツセル」宣言トシテ知ラレタル
モノ是ナリ
當時外交官ヲ軍人學者ノ心血ヲ濃キテ成案ヲ告
ケタルニ係ラス今日ニ至ルマテ二十餘年間空
シク筐底ノ死文ニ終ラシメタルモノハ當時列
強間ニ全會一致ニ對シテ異議アルモノ數ナカラ
ス其内特ニ英國ノ如キ其陸軍制度ニ於テハ他
ノ邦國ト事情ヲ異ニセルノ結果該宣言ニ對シ

テハ全ク超然主義ヲ執ルノ態度ニ出デ且彼レ
ノ該宣言ヲ評シテ弱小國ノ依準トシテ不利ナ
ルベキヲ揚言スルヤ其他歐州群小國中之ニ和
シテ異議ヲ唱フルモノ數ナカラス且北米合衆
國モ亦之ニ加盟スルコトヲ敢セサリシ結果遂
ニ各國ノ批准ヲ見ルニ至リシモノ今ヤ露國「ニコラス」皇帝ハ當時先帝
亜歴山二世ノ志ヲ成サンコトヲ欲シ今回其草
案ヲ以テ原案トナシ之ヲ改正シテ現今ノ事情
ニ適スル処ノ陸戰條規ノ完璧ヲ作ラントノ希圖
スルモノニシテ斯會議閉會以来幾多ノ委員會
部會ヲ重ネテ其稿ヲ脫シ六月三十日ノ本會議
ニ於テ成案ヲ是認スルニ至リ茲ニ二十餘年間

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

空シク筐底ニ藏シタル孔文ヲ囲生シテ各締盟國ノ條約文タルニ至ラシメタリ之レ斯道ニ於ケル一大進歩トシテ見ルベキモノニ属セリ然レトモ坤輿上國ヲ建ツルモノ千差万別各々具政体ヲ異ニシ宗教ヲ異ニシ歴史ヲ異ニスルモノヲ擧テ一律ノ戦規ノ下ニ服從セシメントスルガ如キハ固ヨリ容易ノコトニ非スシテ此間多少各国間ニ異議ナキ能ハザルハ孰レノ時代ト雖モ遂ニ免ルベカラサルコトニシテ理ノ當サニ然ルベキ処ナリ特ニ英国ノ如キハ果然今回モ亦此以前ノ歴史ヲ繰リ返シ他ノ邦國ヨリ分立シテ超然主義ノ態度ニ出ツルコトナカランヤトノ懸念ハ彼国委員ノ委員会ニ於ケル

當時ノ言動ニ徴スルニ稍々其機微ノ顕ハルヽ事ナシトナサス

左ニ記載スル六月十日ノ委員會ニ於ケル英國委員少将「ジヨン、アルダ」氏（Sir John Ardagh）ノ宣言ハ特ニ注意スベキモノアリ

六月十日委員會ニ於ケル少将「アルダ」氏ノ宣言

予ハ茲ニ千八百七十四年ノ宣言ノ各国間ニ快定ヲ得サリシ源因ヲ討究スルノ要ヲ見ヌト雖モ（暗ニ恐嚇ノ意ヲ偶スルニ似タリ）今回モ亦前轍ヲ蹈ンテ各國間ニ多少異議ヲ生スルコトナキヤヲ危ムモノナリ之ヲ避ケントセンニハ如何ナル名案アルヤト言フニ予ハ本宣言ノ性質

テシテ各國ノ必守ノ條約トナスコトナクシテ
從来ノ慣例ノ如ク之ヲ以テ單ニ各國間ニ於テ
自國ノ軍隊ニ與フル処ノ訓令ノ依準タルニ止
マルモノト為ンコトヲ欲スルモノナリ如斯ス
ルトキハ各國委員間ニ於テ本問題ノ可否ヲ論
スルニ於テモ竟屈スル処ナクシテ大ニ其是非
ヲ闘ハスニ於テ實裕ナル得ベク又英國
政府ト雖モ彼ノ千八百七十四年ノ前轍ヲ踏ン
テ他邦ヨリ分立シテ超然主義ヲ執ラサル可ラ
サルニ至ルコトヲ避クル為メ断然トシテ得ベシ云々ト
テ即チ彼ノ言ハ本宣言ヲシテ各國必守ノ條約
ノ性質以外ニ擲出シテ又タ三文ノ價値ナキモ
ノタルニ至ラシメントスルノ底意ニ出ツルモ

ノニ似タリ
スワコソ英國ハ再ビ千八百七十四年ノ破壊手
段ノ伏線ヲ張リ来レリトハ各國委員ノ脳裡ニ
浮ブ処ニシテ斯道ノ泰斗タル議長ノ「マルテンス」氏
任スル処ノ露國委員タルハ是ヲ斯法ノ死活ノ繋ル大危機ト見テ取ルヤ
決然トシテ對ヘテ曰ク手ノ提案者タル露國政
府ニ命ヲ聞ク処ノモノ甚ニ吾人ノ今日此ニ在
ルモノハ他ナシ斯業ヲ全ク國際條約ノ性
質タラシメ締盟國ヲシテ之ニ依テ互ニ相犯ス
ベカラサル精神的保険ノ具タラシメ併セテ之
ヲ以テ各國具ノ軍隊ニ與フル処ノ戦時訓令ノ
基礎タラシメンコトヲ待望スルニ在リト

越ヘテ六月二十日ニ至リ全少將「アルダ」氏ハ戰
闘員ノ資格問題ニ關シテ突然左ノ修正ノ一ヶ
條ヲ提起ス

戰闘員タルノ資格ニ關スル「アルダ」少將ノ
提議

「ブラッセル」宣言草案二章(旧)ノ戰闘員タルノ資格
ヲ規定スルノ條項中ニ左ノ一ヶ條ヲ挿入セン
コトヲ提議ス

但シ本章ノ各條ハ被侵國人民ガ組テ合法ノ
方便ニ依リテ愛國的防戰ノ義務ヲ盡クスコ
トヲ妨ケサルモノトス

是レ明カニ戰闘員タルノ資格ヲ規定スル処ノ
條項ノ精神ヲ打破シテ敵軍ガ國境ニ逼ル場合

ニハ老若男女ヲ問ハス各人兇器ヲ取リテ起テ
敵ト闘フコトヲ許スモノニシテ所謂英國傳来
ノ主義ヲ茲ニ再ビ主張セントスルモノナリ

本問題ニ関シテハ曩キニ(六月六日委員會)白耳
義國全権ヨリモ全一ノ精神ニ依ル処ノ動議ノ
提起アリ暗ニ人ヲシテ千八百七十四年ノ當時
英國並ニ露小國ガ相携ヘテ本問題ニ對シ異議
ヲ挟ミタル當時ヲ想起セシメタル轉タ本問題ハ前
途紛議ノ前提タルコト莫ランヤヲ想ハシム
此動議ニ對シテハ有力ナル獨露委員ノ反對ア
リ其要ハ戰闘員タルノ資格ヲ規定セザル時ハ
戰闘ヲシテ一般人民ノ殺戮ヲ招キ其惨禍ノ及
フ処測ル可ラサルモノアルニ至ラントテ其他

交々起テ英國委員ノ動議ヲ非難スルノ聲喧シク英國委員モ遂ニ其為ス能ハサルヲ視テ動議ヲ撤回セリ

六月六日委員会ニ於ケル白耳義國全権「ベルナード」ノ動議ニ係ル敵地ニ於ケル法権ノ施行並ニ徴発権ニ就テ

氏ハ「ブルッセル」宣言(但)中其第三、四、五條及第四十二、四三條ヲ削除シ且ツ戦闘員タルノ資格ノ範圍ヲ制限スルコトヲ不可トスルノ趣旨ニ出ツルモノナリ

其要ニ曰ク被侵國ガ為侵國ニ對シテ豫メ其法権ノ施行若クハ徴発権ヲ認識スルガ如キハ人情ノ自然ニ背馳スベキモノタルヲ以テ宜シク

如此條項ハ之ヲ一般ニ國際公法ノ解釋ニ止メ敢テ國際條約ノ條項タラシム可ラス且敵軍境ニ逼ルノ日ニ於テ戦闘員タルノ資格ニ制限ヲ置クハ愛國的人情ニ戻ルモノタルヲ以テ大ニ不可ナル所以ヲ痛論シテ「ブルッセル」宣言草定以来茲ニ二十餘年尓来空シク筐底ノ死文タラシメタリ今ニ於テ宜シク本問題ヲ決定セザレバ或ハ恐ル再ヒ前轍ヲ踏ムコトナキヲト意氣軒昂雄辯流ルヽガ如シ氏ハ年既ニ古稀ヲ過キ猶饒鑠トシテ彼ノ斯会議ノ難局タル第一委員会(軍備制限)ニ議長トシテ抜群ノ技倆ヲ示シタル人ニシテ蓋シ各國委員中ニ在テ錚々タル老

滑ナリ

議長「マルテンス」氏ハ本問題ヲ以テ斯道原則ノ繋ル処ノ重要問題ト見テ取ルヤ辨解尤モ努メタルモノヽ如シ曰ク勝者ノ権力ハ事実上無制限タルベキヲ以テ之ヲ確定豫知スルハ即チ敗者ヲ擁護スルノ所以トナスト若シ論者ノ如ク之ヲ確定豫知スルノ所ナクシテ單ニ公法若クハ慣例ノ範圍ニ一任シ置クガ如キハ偶々勝者ノ権力濫用ヲ招致スルコトヲ虞ルヽモノニシテ之ヲ設クル所以ノモノハ勝者ノ権力範圍ヲ画定シテ敗者ノ蒙ル処ヲ輕減スルノ精神ニ出ツルヲ以テ本條ノ如キハ之ヲ存在セシムルハ敗者ニ利アルモ具害ヲ見

サルモノナリト蓋シ論者ノ説ノ如キハ過々弱小ノ國ヲ以テ雄邦ノ間ニ介立シ動モスレバ他ノ犯ス処タルノ危位ニアルコトヲ揚言シ敢テ弱者ノ側ヨリ本條ニ解釈ヲ下シ其存在ヲ不可トセルヲ以テ斯クハ議長ノ説明ノ論鋒ヲ取リタルモノナルベシ

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

六月一日第二委員第二部會ニ於ケル米國陸軍大尉「クルヂエー」氏ノ提議ニ係ル戰時交戰國ノ海上ニ於ケル私有財産ヲ保護スルノ件ニ就テ

六月一日第二委員第二部會ニ於テ米國委員「クルヂエー」大尉ハ其「ブラツセル」宣言中第十三條ノ末項ニ陸戰ニ於テ敵國人民ノ私有財産ヲ尊敬スベキ一節ニ論及スルニ當テ米國ガ年來懷抱セル処ノ海上私有財産保護ノ件ニ就テ提議スル処アリ

夫ノ米國ガ海上私有財産ヲ陸戰ノ條規ト齊シク交戰國ガ互ニ相侵スコトヲ禁シメカラシメントスルハ年來ノ宿論ニシテ彼ノ千八百五十六年ニ

所謂「巴里宣言」ニ加盟ヲ拒ミタルモノ亦之カ爲メナリシハ普ク人ノ熟知スル処ナリシガ恰モ好シ此際ノ萬國會議ノ機會ニ投シテ宿昔ノ志ヲ成サント欲シ本國政府ノ訓令ニ基キ本問題ヲ會議ニ提起セント其機會ヲ窺ヒ居タリシカ今日ニ至ルマテ之ヲ提起スルノ機會ナカリシガ會々陸上ニ於テ交戰國人民ノ私有財産ニ就テ論スルニ當リ之ヲ措テ他ニ提起スベキ機會ナレト視ルヤ少シク其牽強附會ナルニ係ラス(如何トナレバ本宣言案ナルモノハ單ニ陸戰ニノミ其範圍ヲ限ルモノナレハ)夫ノ傳來說ヲ提起シタルニ和蘭國委員ノ熱心ナル贊成アルニ係ラス(當國ノ如ク微弱ナル海軍ナルニ係ラス

其海上貿易ニ於テハ特ニ発達セル國ニ在テハ
尤モナリ）欧州列強中多数強國（特ニ英佛ヲ
希望セザルヲ以テ提議ヲ以テ會議ノ権限外ニ
渉ルノ問題ト做シ之ヲ議場外ニ放逐セント欲
スルモノハ如ク討論ノ末本問題ハ之ヲ議ス可
キ限リニ在ルヤ否ハ之ヲ他日ノ全委員會ニ於
テ決議スベシト為シ中止スルニ至レリ
其後本問題ノ成行ニ就テハ種々ノ説アリ之ヲ
議題トスルヲ好マザル論者ハ之ヲ以テ露国
政府提起ノ議題中ニ含蓄セザルヲ以テ當初各
全権間ニ協議ノ通リ問題外ヲ以テ之ヲ握潰シ
終ランコトヲ主張シ
注。會議ノ當初ニ於テ各國ノ全権ハ會同ノ

未タ原則ヲ一定
曰露國政府ノ提起ノ
切之ヲ議セサル事但其問題ニシテ果シ
テ議題内外ナルヤニ就テ疑義アルモノ
ニ限リテハ各國委員ノ審査ヲ待テ之ヲ
決定スベシ

又之ヲ議題トスルコトヲ希望スル論者ニ在テ
ハ縦令本問題ヲシテ露國政府ノ議題外ト見做
スト雖モ本年四月十六日附和蘭國外務大臣ボ
ーホール氏ノ各國ニ致セル招待状ニハ明ニ去
年八月露帝ノ宣言中ニ関連ヲ有スル問題ニ就
テ之ヲ議スベシトノ意味中ニハ確カニ含蓄ス
ルモノト見做サザル可ラス云々然レ共後者ヲ

主張スルモノハ寥々ニシテ皆多クハ本問題ヲ以テ會議ノ議定權限外ニ渉ルモノト見做セリ米國ト蚩氏此ノ大風潮ニ向テ逆行セント欲スルモ到底成效ノ望ナキハ善ク之ヲ知ルモノナルベシト蚩氏米國ガ積年宿論ノ手前且ハ本國政府ノ訓令ノ促ス処トナリテ米國全權ハ遂ニ全國各全權ノ連署ヲ以テ宣言書ヲ議長ナル露國全權「スタール」氏ニ致シ其宿昔ノ懷抱ヲ披瀝シ坤輿到ル處人民ノ幸福ヲ增進スルニ於テ最モ急務ニ係ル問題ナル所以ヲ陳シ此際万國会議ニ於テ本問題ノ解釈ヲ得ンコトヲ希望スルノ旨ヲ詳述シ議長ハ本宣言ヲ各國委員ニ致シテ斯テ委員全會ニ於テ米國建言ニ基ク処ノ議

題ト為スベキヤ否ヲ決定スルノ手續トナレリ

七月五日第二委員全會ニ於テル戰時海上私有財産ニ係ル米國ノ宣言ニ就テ

米國ノ宣言ハ七月五日ノ第二委員全會ニ於テ其取捨ヲ諮ルコトト為レリ開会劈頭議長「マルテン」氏ハ自己ノ意見トシテ反對論ヲ述ヘテ曰ク本問題ハ其範囲ノ及フ処頗ル宏大ニシテ輕々ニ決議シ得ベキ問題ノ性質ニ非ス故ニ此際ハ之ヲ議定スルコトヲ避ケテ此際ハ只之ヲ將來ノ國際会議ノ議題ニ登スベシト云フコトヲ決議スルコトニ止メテハ如何ト所謂体裁善キ否決ヲ與ヘント試ミタリ

此際議長ノ勧告ハ最モ其當ヲ得タルモノニシ

テ既ニ議長ノ明示スルガ如ク若シ本問題ヲ決セントスル時ハ勢ヒ戦時禁制品ナル戦時國際公法ノ泾渭ナル問題ニ立チ入ラザル可ラズ是レ僅々ナル會議期間ノ善ク議定シ得ルノ限ニ非ス且會主タル露國政府亦之ヲ議題トスルコトヲ欲セス況ンヤ英佛ノ如キ絶体的ニ本問題ニ對シテ反抗ノ氣勢ヲ示ス場合ニ於テ若シ之ヲ議題ト為シタル結果ニ陥ル如キコトアランカ國利民福ヲ增進スル処ノ會議ノ体面ヲ傷ケ且提議者タル米國ニ取リテモ此ノ反抗ノ氣焔ンナル時期ニ於テ強テ之ニ逆行シテ却テ一敗塗地ノ否運ニ陥ル如キコトアランカ是レ

決シテ兩者ノ志ヲ成スノ所以ニ非ル可レバナリ

米國全權ハ議長ノ意見ニ對シテ憮然トシテ曰ク斯ル國利民福ヲ增進スルニ必要ナル急務問題ニシテ本會議ノ容ルヽ処トナラザルハ遺憾ノ極ミナリトテ議場ニ向テ先ツ邦語ヲ以テ自己ノ心情ヲ吐露スルコトヲ許サレタシトテ是ヨリ滔々數千言大ニ米國カ年来ノ抱負ヲ陳述セリ

英國ノ全權バンスホート氏ハ之ヲ聽キ如何ニモ之ヲ問題外ニ放逐シ終ラント欲シテ頻リニ問題外ヲ以テ之ヲ駁撃セリ露國海軍委員

永之ニ和ス

愛ニ於テ議長ハ特更ニ問題外ナルカ否ニ就テ
票決スルコトヲ避ケテ當初自己ノ說タルヲ
將来ノ國際會議ノ議題トナスベキヤ否ヲ諮ル
ニ多數ノ委員ハ之ニ賛成ノ意ヲ表シ獨リ英國
全權ハ此点ニ於テ自己ノ意見ヲ発表スルサヘ
本國政府ヨリ何等ノ訓示スル処ナキニ言辞ヲ
藉リテ意見ヲ発表スルコトヲ拒ミタリ而シテ
佛國全權モ亦英國全權ト全位置ニ在ルコトヲ
明言ス
之ヲ將来ノ國際会議ノ問題ニ登スベシトハ謂
フ事ハ何等該問題ノ賛否ニ関係アルベキ筈ナ
キハ既ニ議長モ亦之ヲ説明スル処アリテ明瞭
ノ事ニ屬スルモノタルニ係ラス英佛全權ガ特

ニ此事ニ言及スルサヘ之ヲ避ケタルハ豫メ該
問題ハ到底英佛ニ於テ將来ト雖モ決シテ全意
スル処ト ナラサルベシト云ヘル意味ヲ発表ス
ルニ齊シキモノニシテ彼レ両國ガ本問題ニ對
シテ如何ニ決然タルヤハ窺ヒ知ルニ足ルモノ
アリ
米國全權一日我邦ノ全權ニ語ル処ナリト云
ヘルヲ洩聞スルニ彼モ亦今回同問題ノ成立
ヲ豫期セス只英國ニシテ今後自由党ヲ以テ
政府ヲ組織スルノ際ニハ英國ノ同情ヲ得ル
ニ望ミアリト語レリト然レトモ此希望ハ大
ニ望ミ少ナキモノト云ベシ
特ニ奇観ナリシハ英佛両國ガ該問題ヲ解釈ス

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

ル点ニ於テ其趣旨ヲ異ニスルモノアルニ係ラス齊シク該問題ヲ排斥スルノ言動ニ至テハ同一轍ニ出テンコトニシテ頗ル妙ト云ベシ

又茲ニ注意スヘキハ該討議ノ際英國全権ガ米國全権ノ熱誠ナル問題擁護説ヲ為スニ係ラス屢々問題ヲ議場外ニ跳子ニ出サシメンコトヲ努メタル態度ハ頗ル意想外ナリキ如何トナレハ本會議ニ関シテハ各國共ニ内密ノ打合セ乃至運動ト云ヘル如キハ比較的其形跡ノ稀少ナルニ係ラス英米ノ間ハ動モスレハ黙識暗契ノ通スルコトヲ認メシムルモノ之レ有ルニ係ラス(是レ有力ナル英國委員ヨリ聞知スル処ナリ)獨リ本問題ニ関シテハ英米

絶對的反對ノ態度ニ出タル事是ナリ曩キニハ小銃彈丸ノ問題ニ関シテ英國ノ「ダムダム」丸ノ滿場一致ヲ以テ否認ノ否運ヲ見ルノ際ニモ独リ米國ノミハ英國ニ殉シテ反對ノ地位ニ立タルニ係ラス此日英國全権ニシテ而モ米國駐劄大使ノ資格ニ於テ為シタル言動トシテハ轉タ冷酷ニ過クルヲ想ハシムル素ヨリ一國ノ国是ヲ以テ國交ノ情誼ニ殉セシムルハ能クスル処ニ非ルヘキハ勿論ナリト雖モ其問題外ヲ以テ之ヲ迎ヘ且ツ之ヲ将来ノ議題トスルサヘ之ヲ拒ムノ言動ニ出テタルハ米國全権ニ取リテ最モ甚味タルヘシ英人ノ事ニ當テ冷酷ナルハ皆善ク人ノ知ル処ナリト

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

蚤氏如斯ハ又注意ニ値ヒスベキヲ以テ茲ニ附記ス

攻囲及砲撃ニ係ル部會ノ議論并ニ七月一日委員全會ニ於ケル伊國全権「ニグラ」伯爵ノ提議

「ブルツセル」宣言改正委員部會ニ於テ攻囲及砲撃ヲ論スル章ニ及ンテ端ナキ海上砲撃ノ議論ヲ湧起セシメタリ

其原案タル宣言ノ第四章第十五條ニ曰ク攻囲ヲ加フベキハ防守シタル場所ニ限ル開放シタル市邑ノ家屋ノ聚合又ハ村落ニシテ防守セザルモノハ襲撃シ又ハ砲撃スルコトヲ得ス(今囲改正ノ第二十五條防守セザル市府村邑住居又

ハ建築物ハ襲撃シ又ハ砲撃スルコトヲ得ズ)ニ至テ海上軍艦ヨリ砲撃スル場合モ亦含有スベキヤ否ト云議論ヲ生シ和國陸軍委員少將「ボルチユガール」氏ハ其然ルベキヲ主張シ白耳義全權亦之ニ和セリ然ルニ本宣言ナルモノハ凡テ陸戦ノ條規ニ限ルヘキノ性質ナルヲ以テ之ヲ海上ヨリノ砲撃ニ適用セシムベシト云ヘルニ至テハ大ニ疑義ヲ生ジ依テ此項ハ追テ委員全會ノ決議ニ待ツベシト為リ居リシカ七月一日ノ委員全会ニ於テ伊國全権ハ之ヲ海上砲撃ノ場合ニモ適用スベシト提議セシニ暹國ノ委員ニシテ報告委員ナル「ロラン」氏(白耳義人ニシテ公法學者)ハ之ニ對ヘテ本案ハ單ニ陸戦ノ條規

ニ其範圍ヲ限ルモノナレバトテ之ニ反對ス
議長「マルテンス」ハ例ニ由テ之ヲ仲裁シテ曰ク
本案ヲ海上砲撃ノ場合ニ適用スベキヤ否ヤニ至
テハ各國政府ノ慎重ナル考究ニ待ツノ要アル
ベケレバ今之ヲ即決スルコトナク他ノ問題ト
共ニ將來ノ國際會議ノ議題ニ登ストセンニハ
如何ト伊國委員先ツ之ヲ領シ其他ノ委員皆之
ヲ贊ス
此際ニモ英國全權ハ苟モ事海軍ニ關スル問題
ニ向テハ嚴密ニ超然主義ノ態度ヲ執ルベキヲ
明言シテ敢テ相談仲間ニ入ルコトヲ欲セス是
彼ノ國是トシテ陸軍ニ關スルコトハ常ニ消極
主義ノ態度ヲ執ルニ更シテ事苟モ海軍ニ關ス

ルトキハ直ニ積極主義ノ態度ヲ執リ事ノ苟モ
海軍ノ勢力若クハ行動ヲ拘束セントスル條項
ニ對シテハ全ク其自由ヲ保留シ海上ノ優權ニ
對シテ他ノ國ヨリ一指ヲ染ムルコトヲ容サ
ルニ似タリ彼ノ海上ニ覇タル所以亦茲ニ在
リ

右謹テ報告仕候也

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396

国立国会図書館　伊藤博文関係文書（その1）書類の部 396